

やまたらけ

YAMADARAKE

OCTOBER
No.31
2008

霊峰七面山に迫る

七面山は早川町の南側、身延山地の一角をなす標高1982mの山である。山の地盤は柔らかく、「がれ場」と呼ばれる崩落箇所が山頂付近に数多く存在する。

七面山の名は、板のような急な「がれ場」が七つの面にあることから「なないた(七面)がれのたけ」とよび慣らされていたことが由来とされる。『甲斐国志』によれば、「七面山をナナイタガレとも云う。此の山痛く欠けたる所、七つあるらん。又七面大明神を祀り遂に山名と為る」とあり、また江戸時代に発行された身延山参詣の案内書『身延鑑』には「山を七面というは此の山に八方の門あり。鬼門を閉じて聞信戒定進捨懺に表示し、七面を開き七難を払い、七福を授け給う七不思議の神の住ませ給うゆえに、七面を名づける侍るとなり」とある。

さらに時代をさかのぼると、鎌倉時代の日蓮の書状の中に「七面の峰」「七面の山」「七面のがれ」「七面と申す山」「なないたがれ」「なないたがれのたけ」といった様々の記述がみられる。この頃には既に「七面」という山の名と霊地としての性格を有していたと考えられる。

現在でも七面山山頂付近にある「大がれ」のその姿を見ると、宗派を問わず見る者を圧倒する威容であり、名前の由来の一端をうかがい知ることができる。

この七面山にはどのような歴史があり、人々はどうのように関わってきたのか、探ってみた。(向井真行)

七面山は修験の場であった

七面山という名の山は、修験道発祥の地である奈良県吉野の大峰山にも存在する。この山の断崖が切り立った山の様子は早川七面山とかなり似ていて、さらには早川七面山に残る「七つの池」の伝説(コラム②)は吉野七面山にも存在する。

修験道の開祖とされる役小角(えんのおづぬ)が広めた修験道は甲斐国では平安時代に定着し、富士山や鳳凰山、大菩薩などが山岳信仰の対象となったが、七面山もそこに含まれていたと思われる。また、早川町の東隣の増穂町にある小室山・妙法寺記には「西峰とて後山に七面明神の宮あり」とある。この七面明神の伝説も吉野七面山に残されており、早川七面山は修験の場であったことを伺わせる。

身延往還(身延山と七面山を結ぶ参詣の道)上の十万部寺や神力坊に祀られている「妙法兩大善神」は元は吉野・太郎ヶ峰、次郎ヶ峰の天狗であったよ



十万部寺にある日蓮の像。左は、南部実長。



十万部寺に祀られている「妙法兩大善神」。手前の紋が天狗の団扇を模しているようにも見える。



うだが(鎌倉時代、修験道の山伏は天狗と呼ばれていた)、身延山に棲む二体の天狗で火難・盗難除けの神様として信仰している寺もある。

日蓮と七面天女の出会い

七面山が日蓮宗の霊山の性格を持つようになるのは鎌倉時代、日蓮が身延に入山して以降のことである。時は1274年、鎌倉を離れた日蓮が次に移り住む場所として選んだのは身延であった。身延へ移ったのには、この地方を領有し日蓮に心酔していた南部(波木井)実長の熱心な誘いがあったこともあるが、日蓮自身が「山林に交わって世の推移を見、自分の死後、正法を弘めるため門徒の育成を図りたい」と思ったからである。

当初、日蓮は身延に永住する気持ちは無く、広く日本中に教えを広めるために流浪することも考えていたよ

だが、次第に「この山は静寂で水は美しい、人里の煩わしさを離れた幽邃の深山は心にかかない、天竺の靈鷲山(釈迦が法華経を説いたとされる山)をこのみざりに移し、唐土の天台山を親りに見る」と賞賛するに至る。身延山御書類聚には「波木井殿の御有にて九ヶ年の間、身延山にして心安く法華経誦誦し奉りつる。志はいつの世にか思い忘るべき」とあり、身延の地を大事に思い腰を据えていたことが分かる。晩年、体調を崩し身延から去ることになった日蓮は遺言状ともいえる実長への書状に「いづくにて死に候とも、墓をば身延の沢にさせ候べく候」とも書き記している。

この頃の日蓮と七面山との関わり始めを示す伝説が残されている。ある時、いつものように日蓮が説法をしている場に一人の妙齢の女性が現れる。普段見かけることのない女性であったので周囲が不思議に思っていると

ころ、日蓮は「みんなに正体を見せてやりなさい」と水の入った花瓶を差し出した。すると、女性は一滴の水を手のひらに落とすとたちまちに大きな龍となった。しばらくして元の女性の姿に戻ると「私は七面山に住む七面天女です。法華経弘道の大導師として釈迦より命を受けて身延山を水火兵革の災難から守るために七面山の池に住んでいます。法華経を信じる全ての人を守護し、所願成就の一念な求道を永遠に見守り続けるでしょう」と言い残し、七面山へと消えていった。

日蓮自身が七面山に登詣することは果たせなかったが、日蓮の死後、入道し日円と名乗るようになった南部実長と日蓮の弟子である日朗とが七面山に登り、七面天女を祀るお堂を建立。1297年9月19日のこの日が日蓮宗における七面山の開創となり、毎年この日には大祭が行なわれている。

なぜ、七面山の山頂は身延町の飛地なのか？

地図などを見てお気付きの方もいると思うが、七面山の頂周辺は行政区画上、早川町ではなく、なぜか身延町の飛地となっている。これには諸説があるが、その一つを紹介しよう。

日蓮没後、七面天女を祀るために七面山に登る途中、赤沢を渡った日朗の教えによって集落妙福寺と村人は真言宗から日蓮宗に改宗した。この際、七面山管理していた妙福寺と村人は、面山を身延山に寄進することにした。それ以降、久遠寺の管理を経て身延町の飛び地になったといわれている。



七面山の「七つの池」伝説

七面山には7つの池があるといわれている。一の池、二の池は実際に山頂付近にあるが、三の池からは全く分からないという説と、樽坪(くれつぼ)集落、葉袋集落、雨畑の奥にある池大神を含めるとい説もある。また「七つ目の池を見ると目がつぶれる」という言い伝えも残されている。

写真下/樽坪集落の上にある七面堂と池。10月19日に大祭が開かれる。



写真上/敬慎院の裏にある一の池。龍神が出現するといわれている。



七面天女の伝説は舞台こそ身延であるが、早川と七面山の深い関わりを示すものでもある。話の始まりは平安時代の京の都。美しいと評判の一人の姫がいたが、不治の病に罹ってしまった。手を尽くすも良化しないので、厳島弁財天に祈ると「是より東方、甲斐国波木井郷(現在の身延町波木井)の水、七ツ池の霊山あり。毘沙門天王の水を湛え、八つの功德を備へたり。この水をもつて浄めなば忽ちに平癒せん」と授けられる。すなわち七面山に赴けば治癒する、とのことである。

都から七面山にやってきた姫は山頂の池で身を清めると弁財天の授け通り平癒したが、「私はこの池に住む因縁(いわれ)あり」と叫ぶと池に飛び込んでしまった。すると姫は大きな龍となり「末法の時に在り、現れては法を護らん」と言い残し池の中へ消えていった。

姫に何度も求婚していた池の宮という皇族は都から霊薬を携え姫を探し求めて七面山の麓までたどり着き、姫のことを尋ね歩いたが誰もが「みない、みない」という返事ばかり。さらに姫が池に消えたことを知り絶望した池の宮は悲しみのあまり「この葉袋も用なきもの」と川に棄て、川中の小島で経を踊したのち、近くの池に身を投じてしまった。それからこの山里は「御葉袋(みない)」、「経が島」という名で呼ばれるようになり、現在の地名である葉袋、京ヶ島の由来となったとされる。この伝説は後に七面天女、あるいは七面大明神の話として受け継がれ、身延での日蓮との出会いへとつながっていく。

一方、雨畑には「池大神」の伝説が残されている。高岸源左衛門という獵師が、雨畑の奥地で光るものと遭遇したので「汝、生あるものならば此の矢の先に止まれ」と叫ぶと金の玉が矢に止まった。これを持ち帰って飾っていたが、夜中に夢枕で「自分を是より三、四十丁山の上にある池のほとりに祀るように」とのお告げがあったので、村人たちが七面山の一の池のほとりに祀った。そこで一夜を明かすと再び夢



9月19日に開かれる大祭の様子。

七面山の山頂付近にある、敬慎院と奥の院には、今でも泊まることができる。写真中は名物のロール布団。敷き布団も掛け布団もつながっている。下は夕食。もちろん精進料理。量が少ないようだが、ご飯とみそ汁はおかわり自由。お神酒もつく。



七面山敬慎院。身延山と法華経の守護神である七面大明神を祀っている。現在の建物は、安永5年(1776)の火災の後に復興されたもの。七面造りといわれる独特の建築様式。檜皮葺(ひわだぶき)の屋根が美しい。1,000人は泊まることできる。





枕で「願いを叶えよう」とお告げがあったので、「水が欲しい」と頼むと村には清水が湧き出した、というおおよそ800年ほど前の話で七面天女の伝説より古いといわれる。

室町時代以降は早川も徐々に日蓮宗に改宗するようになり、今では寺の多くが日蓮宗である。集落で七面山の勤勞奉仕をしたり、大祭(9月19日)に参加したりという風習が多くの集落でみられた。

中でも七面山を正面に見上げる赤沢集落は、身延山と七面山を結ぶ「身延往還」上の物資の中継基地と参詣者の宿場として栄え、参詣が最も盛んだった江戸から明治、大正時代には9軒の旅館の他、住民のほとんどが七面山に關係の深い職業に就いていた。現在でも毎年正月には住民が七面山に登り、七面大明神のご開帳を行なう慣習が残っていたりと、七面山との密接な関わりは他の集落より濃いものがある。

七面山に登ることの意味

七面山が日蓮宗の靈山という性格を持つてからも「修行のための山」という位置づけは変わることはなかった。女人禁制であったため修行僧以外が参詣することはほとんど無く、現在のように登山者が多くなつたのは江戸時代になってからで、それには「一万の方」という人物無くしては語ることはできない。

徳川家康の側室で法華經に帰依していたお万の方は、夫である家康が死すると剃髪し「養珠院」と号して仏の道へ入る。3年間は喪に服していたが、1619年の身延山での大法要の後、七面山の登り口である羽衣白糸の滝で37日間の滝行を行った後、女人禁制を打ち破つて参詣を果たした。以後、七面大明神の伝説も全国に知れ渡るようになり、一般大衆の七面信仰の高まりとともに日蓮宗徒だけではなく、

宗派や目的に関わらず七面山参詣が盛んになり、同時に全国の様々な寺院に七面大明神が祀られるようになる。江戸から明治、大正にかけては七面山参詣は娯楽の一つであったし、現在では俳優やプロスポーツ選手、小さい子供から高齢の人まで様々な人々がそれぞれの目的、思いを持って登っているのである。確かに、白装束で団扇太鼓を持ち「南無妙法蓮華經」と唱えながら登り下りする信徒は多いが、それだけではない。七面山に祀られている神様は七面大明神以外にも存在するし、登山そのものを楽しむ人、御来光(コラム参照)を見るために登る人もいる。多くの人が七面山の魅力に惹かれ、季節を問わず登っていく。すなわち、「信仰の山ではあるが、七面山は誰も拒まない」。今も昔も変わらず人々の心の拠り所となつている山なのである。



写真上/七面山表参道付近にあるお万の白糸の滝とお万の方の像。今でも、滝に打たれることができる。写真下/参道の風景。お題目を唱える白装束の信者と何度もすれ違い、挨拶を交わす。

(参考文献)

- ・宮川了篤・林是晋監修「法華經信仰の靈場七面山」かまくら出版、1994
- ・森宮義雄「七面大明神のお話」七面大明神奉賛会、1976
- ・宮崎英修編「日蓮辞典」東京堂出版、1992
- ・早川町教育委員会編「早川町誌」早川町、1980

コラム

③

七面山の「ご来光」

ご来光とは高い山の頂上で見る荘厳な日の出のことである。七面山では、東方富士山の方角から日の出を見ることができ、大勢の信者や登山客が、題目を唱えながらあるいは写真を撮りながら日の出を待つ光景が見られる。特に彼岸の中日には富士山の頂上から日が昇る、いわゆる「ダイヤモンド富士」が見られる。

この日のご来光の道を地図上で線引きして



みると、上総一宮(千葉県)玉前神社から相模一宮(神奈川県)寒川神社-富士山-身延-七面山-尾張一宮(愛知県)真清田神社-美濃一宮(岐阜県)南宮神社-出雲大社とつながる。上総一宮は日蓮の出生地である天津小湊に近く、龍になった姫の伝説が残る地でもある。各地の一宮を通るということから、何かしらの由緒を感じずにはいられない。

また、このダイヤモンド富士の日は、ご来光が隨身門を通り抜け、敬慎院本殿の奥に祀られている七面大明神の御神体に降り注ぐといわれている。これは単なる偶然ではなく、計算ずくで山門や本堂を設計したと考えるのが妥当ではないか。先人の法華經への深い思いと、敬慎院建設にかける情熱を感じて止まない。



七面山からのダイヤモンド富士を収めた貴重な一枚。撮影:望月理男(草塩)。



湯島の溪谷

早川本流 西山より



隧道を抜けると、大自然の力を見せつけられます。聳り立つ岸壁、狭い谷、燃える山、清き流れ。早川屈指の溪谷です。この谷には、琴路と吾平の悲恋物語が語り継がれ、その奥にはチョンキラ石、イボヤの手甲石など巨石群が出現し、さらに上ると湯島の大杉、家康の隠し湯など伝説の郷へと続きます。

深沢正晴(ふかさわまさはる) 早川町奈良田在住。早川の自然に魅せられ、その姿を収め続ける。これまでに撮りためた数千枚にも及ぶ写真を整理し、データベース化を進めている。

七面山周辺
散策ガイド

本文中では紹介しきれなかったものも含めて、七面山周辺の見どころを余すところ無く紹介します。

気軽に遊びに来てください!
●やまだらけ編集部

角瀬 早川 国道2号

早川町役場 南アルプスプラザ 神通坊

七面山北参道入口 角瀬

やませみ食堂 依屋旅館 依屋観光ひのや 神通坊 七面山 新道

赤沢

七丁目休憩所 安住坊 大トチノキ 日朗上人お手植えと言われているが、それが本当なら樹齢700年。県天然記念物

富士山ポイント 明浄坊

ゴヨウツツジの群落 5月下旬～6月上旬が見ごろ

七面大明神が現れた岩。お題目を唱えながら周りを七回まわるとご利益がある!

北参道登山口

奥の院

ダイヤモンド富士ポイント 敬慎院

大イチイ 表参道約4時間

神カ坊 肝心坊 中適坊 晴雲坊

ところてんや草もちで疲れを癒そう!

大がれ

七面山 1987m

大がれ

大トチノキ

赤沢宿 国の重要伝統的建造物群保存地区

赤沢宿で唯一営業中の旅館 江戸屋 妙福寺 牧水が泊まった宿 えびす屋 石畳 2月下旬～3月上旬 あちこちで咲く福寿草が美しい!

大阪屋 木工房 淳司 赤沢資料館

…若山牧水歌碑 牧水は七面山周辺で31首の歌を詠んでいる。

宗説坊 紅葉スポット

羽衣橋 南アルプスポイント 白根三山が一望できる(写真右)。お万の方の像

身延山 富士山ポイント 十万部寺

モミジの回廊 道狭し、要注意! 法華経を10万部読んだので、十万部寺という名が贈られた。

七面山表参道入口 新道

春木屋 本館・新館 春木屋別館 山田屋 WC 明浄寺別院 P 登山口

羽衣橋 増田屋 白糸の滝 弁天堂

今でも滝に打たれることができます。

身延往還 (みのぶおうかん)

身延山奥の院―追分感井坊―十万部寺―宗説坊―赤沢

身延往還は、身延山久遠寺と七面山とを結ぶ信仰の道である。日蓮上人亡き後、弟子の日朗上人と、日蓮を身延に招いた南部(波木井)実長とが七面山を開くために歩いたといわれる。

久遠寺から奥の院、そこから追分感井坊(かんせいぼう)、十万部寺、宗説坊を通り、赤沢で一泊し、さらに羽衣、七面山敬慎院まで。車道が開通する前は、信者たちもみなこの道を歩いたのだ。

時間程度の道のり。最近では信者であつても歩くことが少ないが、トレッキングコースとしてはなかなか手頃だ。十万部寺から赤沢方面に少し下ると、早川町内の集落や甲府盆地、笹が岳や南アルプスが展望できるスポットもある。

道中、宗説坊付近は杉並木が残り、石工が残したという石灯籠もあつて、昔の参道の面影を残している。運が良ければ、太鼓をたたき、お題目を唱えながら山道を歩く白装束の信徒たちに出会えるかもしれない。



イロハモミジの回廊。宗説坊と十万部寺の間で見られる。時期は気候によって前後するが、およそ10月末から11月上旬。



道中からの眺めは最高。写真左は布引山と笹ヶ岳。右は白根三山。十万部寺付近では、富士山も見られる。



読者の声

●(雑穀について) 食したことのないものが多いですが、かつては多く栽培されていたのでしょうか。米を作るより簡単ということでしょうか？(浜松市、Mさん)

編集部: 平坦な土地がないので、米が作りたくても作れなかったのです。今では健康ブームで雑穀も貴重品ですが、早川では基本的に米以外の穀類が主食で、白米はよほどの時しか食べられなかったそうです。

●以前、西山温泉やおばあちゃんたちの店で、黄色いキビを買って食べました。今回も興味深く読みました。(杉並区、Mさん)

●硯匠庵でたまに買った、通称「赤モロコシ」をご飯に少々入れて炊くと、美味しそうな赤いご飯のできあがり。食感はツブツブモチモチな感じで以来やみつきです。(浜松市、Yさん)

編集部: もっと早川の雑穀を売り出したいのですが、基本的に町民は自分が食べたいから

栽培しているようです。売るなんてもったいない！ということで、観光施設にも大量には出回りません。どこかでみつけたら、すかさず購入することをお勧めします。

■NEXT やまだらけ

32号特集 (12月上旬お届け)

「早川ファッション通信」

早川町でファッション？と思う方もいらっしゃると思いますが、都会ではまず見ることができない早川ならではのファッションがあるんです。それは、おばあちゃんたちが畑仕事をする時に着る野良着。

次号では、この野良着に着目します。機能性、安全性、そして美しさを兼ね備えたアイテムの数々と、おばあちゃん達の着こなしやこだわりを、紹介したいと思います。

豪華賞品？が当たる やまだらけクイズ!

問:かつて七面山に遠足で登った子どもたちは、敬慎院で薬として売っているあるものを作って、宿代の代わりにしたそうです。そのあるものとは何？

- 答 1, 大イチイの枯葉を束ねた煙草
2, ヨウゴ石の欠片を叩き潰した粉末
3, 一の池の泥を丸めた泥団子

正解者の中から抽選で3名様に、七面山のお守りをプレゼントします!

前回のクイズの正解は、1の「蠟石」でした。絵を描いて遊んだそうです。抽選の結果、小谷さん(足立区)、溝口さん(浜松市)の2名が当選しました。おめでとうございます!

登山口から七面山に一歩足を踏み入れる。他の山とは違う雰囲気を感じる。山の中には様々な神が祀られていて、山全体が信仰の対象となっている。参道脇に立つ小さな千枚旗に書かれた願い事、険しい山道、そしてご来光。登る時はいつも厳かな気持ちになる。宣伝するわけでもないのに登る人の多いとのこと。信仰の持つ力、そして七面山そのものの魅力を改めて実感することができた。



発行元/フィールドミュージアム運営委員会
住所/山梨県南巨摩郡早川町薬袋430 〒409-2727
電話/0556-45-2160 ファクシミリ/0556-45-2268
ホームページ/http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/fm/